

富山大学人文学部令和元年度卒業論文

大学生の恋愛関係における SNS の役割に関する一考察

人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
学籍番号 11610088
氏名 高橋紫野香

<目次>

第一章 問題関心	1
第二章 先行研究	2
第三章 調査方法	3
第四章 分析	4
第一節 付き合うまでの経緯における LINE の使われ方	5
第二節 相手の返信速度に対する意識	9
第三節 自身の返信速度に対する意識	13
第四節 恋人間の頻度	19
第五章 考察	22
<参考文献・URL>	26

第一章 問題関心

スマートフォンの急速な普及により、近年 SNS は人間関係を築く上で重要なツールの一つになっている。総務省の平成 29 年度版情報通信白書によると、2016 年では、LINE、Facebook、Twitter、mixi、Mobage、GREE の 6 つの SNS のうち、いずれかを利用している割合は 71.2%であり、そのうち年代別で 10 代では 81.4%、20 代では 97.7%となっていることからわかる通り、若者の間で SNS は強く定着している。特に、LINE を利用している割合は、2012 年では 10 代が 38.8%、20 代が 48.9%であったが、2016 年では 10 代が 79.3%、20 代が 96.3%となっており、若者に LINE が急速に定着しているのがわかる（総務省 2018）。

大森（2014）は恋人関係の形成において、ケータイ・メールの必要性が若者の中で認識されていることを指摘していたが、現在の SNS の普及率の高さや、中西（2018）の調査では恋人との連絡の頻度において、「LINE やメールでのやり取りは 8 割近くの者が「ほぼ毎日」行っていると答え」ていることを考えると、現在ではメールだけではなく SNS も恋愛関係において重要なツールの一つとなっているのではないかと推測できる。そして、SNS という新たなツールが普及することにより、コミュニケーションツールに対する使い方や求められるものも、ツールそのものの特質に合わせて変化しているのではないかと考えられる。本稿では、現在恋人関係にあるカップルを対象に調査を行い、それらの恋人関係の形成や維持の中で、SNS がどのように使用されているかを明らかにしていく。

第二章 先行研究

大森（2014）は、原田（2010）が日本で初めて中学生・高校生の頃からケータイを持ち始めた「ケータイ世代」と定義した 1983 年から 1993 年生まれの男女を対象とし、それらの世代の恋愛関係の成立においてケータイ・メールがどのように使われているかを調査した。その結果、関係性を形成するための第一歩としてケータイの連絡先を知ることが必要であるという語りから、それらの世代がケータイ・メールが恋愛関係を成立させる上で欠かせないツールであると捉えており、特に最初の段階においてはケータイ・メールがないと「きっかけ」が作れないとみなしていることを明らかにした。さらに、メールに使う絵文字を相手によって差別化したり、電話や対面ではなくメールを使うことによって慎重に言葉を選ぶことができるという語りから、対面ではなくケータイ・メールが恋愛関係の形成の第一歩として扱われるのは、「気を遣える」自己を周りに見せることを意識しているためだと指摘した。また、調査対象者が、気づいたらすぐに返信することを「マナー」とし、返信が遅い、またはない人に対し「ルーズな人」だと語る一方で、恋愛関係においては相手からの返信がない場合は自分の失敗だと捉えることをあげ、恋愛関係におけるケータイ・メールでのコミュニケーションが、一般的な対人関係に比べ、より「距離感」をはかりあっているものだとした。その上で、メールでのやりとりやデートの回数を根拠にし、告白は「付き合える」と確信した時に行うという語りの一方で、可能性がないと思った恋愛は諦めてしまうという語りがあることから、ケータイ・メールでのコミュニケーションによって告白し付き合うことができるか判断していると述べた。

これらのことから、大森（2014）は調査対象者たちがケータイ・メールのコミュニケーションにおいて、言葉を慎重に選び、関係性への理解や配慮を行っているということについて触れ、異性とのコミュニケーションを上手く取ろうとすればするほど相手の考え・態度・発言や相手との距離などに過剰に気を遣い、恋愛行動がうまくとれなくなっているのだと指摘した。そして、そういった相手への配慮や自己の保身を行う若者のコミュニケーションや対人関係の在り方が、ケータイ・メールなどのメディアを媒体とするコミュニケーションツールの存在によって強化されていると述べた。

しかしながら、前節で述べたように、現在のコミュニケーションツールはケータイ・メールから SNS に変化してきている。そして、そのように使用されるツールが変わっていく中で、大森（2014）で取り上げられたような扱われ方やその役割についても違いが表れるのではないかと推測できる。そのため、本稿ではその点に着目していく。

第三章 調査方法

恋人関係である大学生の男女のうち、3組にインタビューによる調査を行った。全カップルに便宜上 A～C までの記号を付け、男性なら m、女性なら f をつけて記号化した。

以下、実際にインタビューを行った人物について紹介しておく。

・ Am さん

男性。富山大学院 1 年生。現在の恋人とは地元の友達との繋がりで仲良くなり、付き合うことになった。交際期間は約二年。

・ Af さん

女性。社会人。同上。

・ Bm さん

男性。富山大学四年生。恋人とはサークルを通じて知り合い、付き合うことになった。サークルは現在は辞めている。交際期間は約三年。

・ Bf さん

女性。富山大学四年生。同上。

・ Cm さん

男性。富山大学四年生。現在の恋人とはサークル内で知り合い、係が同じことで仲良くなり、付き合うことになった。交際期間は約二年。

・ Cf さん

女性。富山大学四年生。同上。

今回の調査では、対象とする SNS を LINE、Twitter、インスタグラムの三つに絞り、それらが付き合うまでの過程や付き合った後の関係の維持の中においてどのように使われているのかについて質問をした。必要に応じて追加のインタビューも行った。

大森 (2014) では恋愛関係を構築する段階におけるケータイ・メールを中心として分析されていた。そのため、本稿でも付き合う過程において SNS をどのように使っていたのかを分析していく。更に、大森 (2014) では相手や自分の返信速度について言及されていたが、このような返信速度への意識は LINE のような一対一でコミュニケーションを行うツールにおいてもあるのではないかと予想されるため、本稿でも自身の返信速度や相手の返信速度に対する意識について分析を行う。また、本稿では LINE において頻度について尋ねたが、大森 (2014) にはなかったような特徴的な語が見られたため、その点についても分析を行っていく。

第四章 分析

今回調査を行った三組のカップルの中では、インスタグラムと Twitter はほとんど使われていなかった。特に、Twitter は 6 人全員が登録はしており、恋人同士繋がってはいるものの、Twitter 上でやりとりをすることはなかった。また、インスタグラムについては、Bm さん以外は登録しており、カップル A とカップル C はお互いフォローはしているが、インスタグラム上でメッセージのやりとりを行うことはなく、互いの投稿を意識するような語りも見られなかった。このことから、どのカップルにおいても恋愛関係の形成や維持において Twitter とインスタグラムは重要度が低いことが窺える。そのため、本稿では恋人関係の形成や維持においてやりとりが一番多くなされていた LINE を中心に取り上げ、前章で述べた通り分析を行っていく。

第一節 付き合うまでの経緯における LINE の使われ方

この節では、それぞれのカップルに、知り合い、付き合うまでの過程について尋ね、その中で LINE がどのように使われてきているかについて分析する。まず、その中でも特に LINE によるやりとりがなされていたカップル B から順に見ていく。

カップル B は 5 月から同じサークルに所属し、同じグループの LINE には入っていたが、個人的な LINE のやりとりはなく、1 年生の 11 月後半に控えていた定期演奏会の直前に、Bm さんが Bf さんへ「頑張ろう」という旨の LINE が個人メッセージとして送っていたのみだったという。しかし、その定期演奏会が終わったことを機に、Bf さんがサークルを辞めることになり、サークルという繋がりはなくなった。そして、12 月初めに、突然 Bm さんが Bf さんへ個人 LINE で、「父親の誕生日プレゼントを選ぶのを手伝ってほしい」との内容を送り、Bf さんが了承したことで、二人で出かけることになった。しかし、Bf さんは最初二人きりだと伝えられておらず、その場所に行って初めて二人きりだということを知ったため、この誘いの時点では相手の好意には気づいていなかったと語っていた。なぜその 12 月初めまで LINE をしていなかったのかと尋ねたところ、Bm さんは「現実で喋っているから」と語った。つまり、それまで Bf さんもサークルに所属し、顔を合わせて話す機会が多かったため、LINE 上のやりとりの必要性がなかったということだと推測できる。

この二人で出かけた日を境に、二人は毎日 LINE のやりとりをするようになった。Bm さんの語りでは毎日約 20 往復とのことであるから、かなりの量をしていたと思われる。この時、Bm さんは「関係を切らさないっていう意味で」毎日 LINE をしていたと語っていることから、Bf さんが所属していたサークルを辞め、対面で話すような直接的な関係性がなくなったことに対しての不安があり、それによって LINE に頼っていたのではないかと考えられる。そして、その LINE のやりとりの中で、Bm さんから Bf さんへ「12 月 23 日、24 日あたりを空けていてほしい」というような LINE があり、クリスマスという特別なイベントの付近であったことから、Bf さんはその時に初めて相手の好意に気付いたという。

一方で、Bm さんは、単純にクリスマスを一緒に過ごしたいという思いはあったものの、この時にはまだ告白するつもりではなく、告白を決めたのは当日であり、また、好意を気付かせるようなアプローチのつもりもなかったと語っている。しかし、以下の語りからは、告白のタイミングを伺っていたことが読み取れる。

Bm：んー、難しいな。関係を切らさないっていう意味で LINE してたから、あのときは。んー…その、告白するタイミングは別に 23 日以降でも良かったって言うことはできるけど、23 日以降に会うかはわからないから、お正月が入るから、そっから、そのタイミングを逃すと、告白するタイミングって難しくなるから、だから 23 にしたような気はするんだけど。いつ好意も持っていたって言われると、覚えてないよそんなんってなっちゃうから。

Bm さんは毎日の LINE を「関係を切らさない」ために行い、告白するタイミングについ

て、年末年始を迎えてしまうと「会うかはわからないから」「告白するタイミングが難しくなる」と語っており、会って告白ができるタイミングを伺っていたことがわかる。その一方で、その毎日の LINE については以下のように負担に感じていたような語りも見られた。

Bm: タイミングは遅くても速くてもどっちでもよかったんじゃないかな。23 でも 24 でも。

高橋: あー。ぶっちゃけクリスマスじゃなくてもよかったってこと？

Bm: うん。

高橋: 例えば年末、こういう関係が年明けにあったら、もし 2 月とかにあったら、

Bm: 別にそのタイミングでもよかったと思うけど。でも少なくとも、それまで LINE を続けられるかって話だよね。そんな、俺先のこと、軽く考えてたから。

高橋: うーん。クリスマスっていうのにそこまでのこだわりはなかったのかな？

Bm: うん。

高橋: あー。なるほどね。

Bm: 毎日 20 通、20 往復くらいやってる会話を 1 か月続けられるかって話だよね。たぶん俺には無理だよ。

Bm さんは、「関係を切らさないっていう意味でしていた」毎日の LINE を、「それ（年始以降）まで続けられるか」、「たぶん無理だ」と語っていることから、そもそも毎日の多量の LINE 自体をプレッシャーに感じていたのではないかと推測でき、その上で敢えて意識的に LINE を送っていたことから、Bm さんの中で LINE のやりとりを行うことが関係を繋ぎ維持してく上で重要なこととして扱われていたのだと考えられる。そして、12 月 23 日に Bm さんから直接告白したことによって、二人は付き合うことになった。

以上のように、カップル B では、付き合う過程の中で LINE が関係性を維持するためだけでなく二人きりで出かけるための誘いような重要な場面でも使われていた。また、告白自体は直接ではあったが、「12 月 23 日、24 日を空けていて欲しい」という内容のものは、Bm さんは告白するつもりではなかったと語っているが、それを受けて Bf さんは好意に気付いたとのことであることから、相手の好意に気付くきっかけという意味で告白の予告と考えることができる。このように、カップル B の付き合う過程において LINE は関係性を深め構築していくだけでなく、その関係性を維持するための重要なツールとしても使われていることがわかる。

次にカップル A である。カップル A は、Am さんと Af さんはもともと中学校の時の同級生ではあったが、お互い連絡先は知らず、同窓会で顔を合わせたのが最初だという。そして、その場で Af さんの友人と Am さんが連絡先を交換し仲良くなり、二人と一緒に遊ぶ際に Af さんともう一人の友人が誘われて四人での LINE グループが作られた。（しかし、同窓会の時点では Af さんと Am さんの個人間での直接の連絡先の交換はされておらず、四人での LINE グループが最初だと Af さんが語っている一方、Am さんは同窓会で Af さん個人とも

連絡先を交換したと語っているため、どちらが先かは定かではない。) それから、四人で遊ぶ前に Amさんから Afさんへ突然 LINE で個人的な遊びの誘いがされた。その時は突然であったため Afさんの時間の都合がつかず断ったが、その後に四人で遊んだ日の翌日に、再び Amさんから個人的に食事の誘いが LINE で送られた。しかし、二人きりで誘いだと思いつかなかった Afさんが他の二人を誘ってしまい、四人で食事に行くこととなり、後日、再び四人で遊んだ際の帰り道で、二人で遊園地に遊びに行く約束を口頭でして、詳しい日時を LINE で決めて二人で遊びに行った。その後、再び二人で遊ぶ約束を LINE でして、映画鑑賞と食事をした後に、Amさんが口頭で告白をし、付き合うに至った。

これらのことから、カップル A にとって LINE が関係性を築くためのツールとして使われていることがわかる。Amさんも Afさんも知り合ってから付き合うに至るまで事務連絡以外のものはしていないと語っており、結果的に初めに二人で出かける約束をできたのは口頭であり、その後付き合うに至るまでほとんど LINE のやりとりはされていないことから、カップル A において LINE は関係を維持するためには使われていないと考えられる。その一方で、誘い自体は最初は LINE で行われていたことから、LINE が関係を構築するためのツールの一つとして考えられていたのだと推測できる。

また、カップル C は、二人とも同じサークルに所属しており、一年次の新入生歓迎会に向かい合わせで座っていたことはあるものの、それ以降は直接でさえも話したことはなかったという。LINE 自体も、サークル全体のグループ LINE とサークル内の学年ごとに分けて作られたグループ LINE にお互い入っていたのみで、直接的なやりとりはしていなかった。その後、夏休み中の夏合宿で来年度の係が決まり、Cmさんと Cfさんは同じ係に就くことになったが、その後も暫く個人 LINE でのやりとりはなかった。ただし、Cfさんのほうは新入生歓迎会の時点で LINE を交換をしているかもしれないとはしており、Cmさんは係が決まった後にしたと言っているため、LINE 自体がいつ交換されているかは定かではない。そして、1月に Cfさんから Cmさんに係での仕事の相談が LINE で持ちかけられ、そこから二人で仕事のために会ったり、LINE でやりとりを行うことはあったが、Cfさんは敬語で LINE を送っており、ほとんど事務的な内容だったという。

その後、二人は仕事をしていく中で LINE でやりとりを行い、以前から Cmさんは「社交辞令的」に「一緒に食べに行こう」と言っていた中で、Cfさんがとある店に行ったという報告から Cmさんが「行きたい」と反応し、5月30日にスイーツを食べに二人で出かけることになる。この時、Cmさんはきっかけとなったそれらのやりとりは直接話し、日時のみ LINE で決めたと言っているが、Cfさんは全て LINE だと言っており、どちらが正しいかは定かではない。ただ、5月30日は Cmさんも Cfさんも双方「何を話していいかわからなかった」と語っており、Cmさんは「緊張して」いて「ほとんど会話なかった」と語る一方で、その日の二人で出かけたことは「ターニングポイント」「分岐点」だとも語っていた。Cmさんはこの5月30日に出かける前の LINE でのやりとりは「仕事の話が多かった」が、「それ(5月30日)以降は仕事よりもプライベートは話のほうを、毎日だらだらと続けて

た」としている。しかし、Cfさんはそれ以前とそれ以降であまり内容に差は感じておらず、5月30日以前から仕事以外の話もしており、それ以降もプライベートな話が増えたとは感じていない。その後、二人は係の仕事としてプレゼントを買いに行ったり、二人で予定を合わせてスイーツを食べに行ったり、練習後にファミレスに行き深夜まで話すということを何度もしている中で、お互いに意識していくようになった。Cmさんはその意識している中では「やりとりは多くな」り、「一緒に遊びに行くことも増えた」と言い、自身のLINEについては「意識的に文面多い」、「言葉の量が多かったり、あと話題提供が多かったり」するようにしたと語っている。一方でCfさんにはその時点でも相手からのLINEに変化は覚えていないと語られている。二人が大きな変化があったと語るのは11月のCmさんの家での飲み会であり、CfさんがCmさんの家で二人きりで飲み会をするという状況になったことで、CmさんはCfさんが自分に好意があるのではないかと思い始め、CfさんはCmさんに対する気持ちに変化したと語っている。そして二人はその後の11月24日にCmさん側から直接告白し付き合うに至った。

このように、カップルCでは、好意を持つ、好意を相手に知らせる、相手の好意をはかる、といった重要な側面は全て対面でされているが、デートのきっかけになったり、一方だけではあるものの、意識的にプライベートな話ややりとりの分量を増やしたりと、LINEが関係性を深めるツールの一つとして意識されていることがわかる。

以上のように、個人でLINEをし始めた最初からプライベートな話をしてきたカップルBと、最初は仕事の話が多く仲良くなるにつれて徐々にプライベートな話をするようになったカップルC、付き合うまでプライベートな話はしなかったカップルAというように、それぞれのやりとりの分量や使われ方等に差はあるものの、カップルBとカップルAではデートに誘うというようなアプローチを行う時のツールの一つとして使われていたり、カップルBやカップルCでは意識的にプライベートなやりとりをしたり分量を増やしたりと、どのカップルでもLINEは関係性を構築するためのツールの一つとして使われていた。しかし、その一方で、どのカップルもデートに誘うといった重要な場面等でLINEを使いながらも、告白は全て対面で行っていた。このことから、LINEは関係性を作る一つのツールとして扱われながらも、告白という最終的に関係性を明確にするためのツールという役割は与えられていないのだということがわかる。また、カップルCではデートの誘いが口頭かLINEかという点やLINEの頻度について証言が食い違うことがいくつかあった。このことから、LINEが関係性の構築に使われている一方で、相手とLINEでやりとりを行ったという点については、口頭でのやりとりとの違いがあまり意識されていないのだということがわかる。

第二節 相手の返信速度について

大森 (2014) では、相手の返信速度から相手が自分をどのように捉えているかを推し測ったり、そこから自身の返信内容について不安に思うような語りが見られていた。このように相手の返信速度を意識することは LINE においてもなされているのではないかと推測できる。この節では、6 人それぞれに LINE における相手の返信速度についての意識や、友人や恋人といった関係性においての意識の差を尋ね、その違いに着目して分析していく。

調査を行った 6 人のうち、Am さん、Bm さん、Cf さんは恋人や友人といった関係性に関わらず、相手の返信速度は気にしていないと語った。その一方で、Cm さんからは以下のように恋人関係になった直後の恋人に対して少し意識したという語りが見られた。

Cm：まあ…気に…する…してた、けども、そういう風なんだって思うようになった、最近
は。もともとケータイ見ない子やな、LINE もそんな頻繁にする子じゃないなっていう風に。

高橋：最初のほうは気にしてた？

Cm：そう、まあ遅いなーとは思ってた。既読つかねーって (笑) あれさっき送ってきたば
っかなのに既読がつかないっていうのはよく思ってたとかしたけど。

(中略)

Cm：ま、別に俺は不満ではない、今は。昔はちょっとおせーなーって思ってたけど。まあ
別に今は慣れた、そういうもんやなって。

Cm さんは恋人関係になった直後は Cf さんからの返信の速度を気にして「遅いなーとは思
ってた」と語っている。その一方で、Cm さんからは以下のように相手の返信が遅いこと
を相手との違いだと捉えている語りも見られた。

Cm：まあ気にしてた時も一応あったんだけど、まあそれは元カノとの差…返信速度の差だ
よね。これまで返信速度速い方がいいと思ってた人だからさ。それに慣れてた人だからね。

高橋：だから、そうだよねー、気にしてた時は元カノとは違うなーって思っているものの、
嫌な感情にはなってないの？

Cm：特にはなってないかな。嫌な感情っていうか、寂しいなーとは思ってたけど。

高橋：マイナスな感情にはなってない。

Cm：別にそこまでは。まあそういう人なんだろうなーくらい。

Cm さんは、自身と以前恋人関係であった人との経験から自分が「返信速度速い方がいい
と思ってた人だから」気にしていたとして、Cf さんからの返信が遅くても「寂しいなーと
は思っ」てはいてもそれ以上の感情にはならず、「そういう (返信が遅い) 人なんだろうな」
と捉えていたとしている。

また、Af さんと Bf さんからは相手の返信を強く意識している語りが見られた。Af さん

は自身の返信が遅いため基本的に相手の返信速度はあまり気にしないと語る一方で、以下のように恋人関係になった直後の相手との LINE については意識している語りも見られた。

高橋：でも、その、恋人になった直後って、返信自分も速くしたって言うじゃないですか。てことはその期間はやっぱりちょっとは相手の返信速度は気には＝

Af：＝気にはしてました。

高橋：あー。それは。

Af：なんか逆に自分が変なこと打ったかどうかとか。なんか変なこと言っちゃったかなーみたいな。

高橋：あー。遅いってことですか？（Af：はいはい）あー。

Af：怒らしちゃったのかなとか。え、大丈夫かなとか、まだ恥ずかしくてこちらからいきなり電話かけるとかも無理じゃないですか。え、大丈夫かな、大丈夫かなとかいう。なんで返信こないんだ、うー、とかあります。で友達に LINE で「返信こないんだけど」とかはありましたけど。

高橋：へー。そうなんですね。

Af：今は全くないけど。最初は。

高橋：最初の頃は返信こないと不安だったってことですか？

Af：あ、そうです。せっかく好意持たれてるのに、あ、終わっちゃったって。こんな感じでミスっちゃったやだなーとか。

（中略）

Af：やっぱり速度が速いと自分の返信に興味があるから。速くなってるのかなって。自分、逆に興味あるのに速く返信してほしいのに、あれまだ、みたいだと、気になりますよね。

高橋：なるほど。その、相手の返信が遅い時、なんで遅いの、じゃなくて、なんかやっとなって思うってことですか。

Af：あー、そうですそうです。なんか変な送り方しちゃった、なんか言い方、言いまわし方、変な言いまわし方しちゃったかな。不安になりますね。

Af さんは恋人関係になった直後の恋人の返信が遅いと「自分が変なこと打ったかどうか」など「不安にな」と語っている。そして、相手の返信速度が速くなるのは「自分（Af さん）の返信に興味があるから」として、恋人関係になった相手からの返信速度が遅い時は「せっかく好意持たれてるのに」という焦りや不安の中から、Am さんから返信が来ないことを友人に相談するなど、相手の返信速度を重要視している行動がなされている。Af さんからは恋人関係になった直後の相手に限ってこのような語りがされていることから、このような相手の返信速度によって不安というマイナスな感情に繋がることは恋人関係形成直後に限定したものだと考えられる。

また、Bf さんからは以下のように恋愛関係になった直後の相手に限り返信速度を気にす

る語りが見られた。

Bf: そうだね。付き合いたての頃は気分が浮かれていますから (笑) 恋人の既読はやたら気にしたよね、返信がこの間隔できたからさ、これだけ空けて返そうとか。

(中略)

高橋: なんでそんな気にするの?

Bf: なんか気にしちゃうんだよね。

Bf さんは「付き合いたての頃」は「恋人の既読はやたら気にした」と語り、その理由については「なんか気にしちゃう」と語った。その中で、相手の返信が遅い時に対しては以下のように相手の心配をする語りをしていた。

高橋: 恋人関係になった後に返信の有無とか既読とか気になったよね。じゃあ既読無視とか返信なかった時はどんな気持ちになった?

Bf: ひたすら心配した。何かあったのかもしれない、向こうの身に何かあったのかもしれないってすごい心配した。

高橋: それは向こうが意図的じゃないと思っていたってこと?

Bf: うん、そういうこと。

高橋: 意図的じゃないから向こうの身に何かあったのではないかと思っていたのね。

Bf: うん、思ってた。実際そうだったんだよね、バイトとか授業とかね。

高橋: なるほどね。じゃあ自分が何か変なこと言ったんじゃないかとかではなくて。

Bf: 基本はほとんど心配で、慣れてくると今は忙しいんだなって、今は LINE 返す暇ないんだなって。明らかに自分が LINE でいざこざしてるときに返信来なかったら、あれー自分やばかったかなーって思うけどまあ基本は心配です。

Bf さんは、「明らかに自分が LINE でいざこざしてる時」といった特別な条件下でなければ、相手から返事が無い状態でも相手が意図的に遅くしているとは思わず、「向こうの身に何かあったのかもしれない」と「ひたすら心配した」と語っている。

このように、相手の返信速度において全く気にしていないと語る Am さん、Bm さん、Cf さんの三人がいる一方で、恋愛関係になった直後の相手に限り、相手に合わせ少し意識をしていた Cm さんと、強く意識をしていた Af さん、Bf さんという違いが見られた。さらに、Af さんと Bf さんの中でも、どちらも意識はしているものの、相手の返信が遅い場合に自身の返信を失敗と捉えるというものと、相手の返信の遅さが故意だとは思わず相手の身を心配するのみにとどまるといった違いも見られていた。大森 (2014) では恋愛関係に限り相手の返信の遅さを自身の失敗と捉えるという語りのみを取り上げられていたが、今回の調査では意識をするかどうかでも個々に違いがあり、意識していたとしてもその意識の仕方そ

のものに違いがあることがわかった。

第三節 自身の返信速度

この節では、相手に返信する際、自身の返信速度に対して何か意識はされているのか、その意識に友人や恋人といった関係性による違いがあるのかどうかについて分析していく。

意識をしていると答えた5人のうち、AfさんとCmさんの2人は速くしたと語り、BmさんとBfさん、Cfさんの3人は遅らせたと語っており、速度の調節については違いが見られた。

まず、速くしたと語るAfさんとCmさんから見ていく。Afさんからは、以下のように付き合いたての恋人のペースに合わせ速くしていた語りが見られた。

高橋：やっぱ付き合いたては速めにしたって言うじゃないですか。それは、やっぱ速いほうがいいなって、別に何も言われてないけど速いほうがいいかなって感じで。

Af：なんか向こうが、基本相手のペースに合わせるLINEで、向こうが速いから、速く送らなきゃいけないのかなって。

高橋：あー。なるほど。別に好意を持ったから速くしたとかじゃなくて。

Af：や、でもまだ付き合いたてはまだ、どんどん好きになってく間なんで、うん、でも意識はしてるんで、速くしなきゃっていうのはありますけど。

高橋：なるほど。付き合う前はそんなに速度速くないですか。

Af：速くないと思う。もう、友達も一か月おくとか一週間おくとか。

Afさんは自身がLINEを「相手のペースに合わせる」ため相手の返信が速いから速く返していたとし、恋人関係になった直後の相手を「意識はし」ていることから、「速くしなきゃ」という思いがあったと語っている。更に、Afさんからは、以下のように恋愛関係になった直後の相手に限り返信速度を速める語りが見られた。

Af：＝でも、告白されると意識するじゃないですか。だから、なんか、私、なんか、友達とのLINE平気で一週間おく人なんですけど、あーなんかきたーって思っすぐ返してたと思う。返した、で、なんか向こうも、最初めっちゃ速かって、なんかもううちが10分くらいで送ったら向こうも10分くらいで来るから、最初、今は全然遅いんですけど、最初めっちゃ速かった。

高橋：なるほど。じゃあ最初は結構頻繁に＝

Af：＝んー、たぶんすごい頻繁だと思います。

Afさんは友達とのLINEについては「平気で一週間おく」一方で、恋人関係になった頃は「すぐ返して」いたとしている。そしてそのことについて「告白され」たことから相手を「意識する」と語り、友人とのLINEとの意識の差がはっきりと見られた。

また、Cmさんからは以下のように付き合う前や付き合った直後は気づいたらなるべくす

ぐ返すようにしていたが、現在は後回しにすることもあるという語りが見られた。

高橋：そっか。じゃあ最初の方は速かったわけじゃん？その速かったってのは、まあ、なんていうの、今は気づいてもあとでいっかってなるけど速いっていうのは気づいたらそっことうってこと？もうすぐ？

Cm：そうだね。割とすぐ、気づいたらすぐちょっと合間を、まあ忙しくても、気づいたらそこで休憩がてらちょいちょいちょいちょいって打って、また作業に戻るみたいな、感じだったかな。

高橋：じゃあもうほんとに気づいたらすぐって感じだったんだね。

Cm：まあ、録音されてるから言っているのかわからんけど授業中でも普通に返してたけど、うん、普通に返すけど、今は授業中、まあ今は授業ないけど、授業中だったら、あとででいいかな。極端に言っちゃえば。かなあ。終わってからでいいか、授業が、みたいな。

Cmさんは付き合う前や付き合った直後の速く返していた時期は作業をしていて忙しい時であっても作業の「合間を」縫って「休憩がてら」返信をし「作業に戻」っていたとしている。その一方で、現在は何か作業や用事があった際はそちらを優先し返信を後回しにして、返信をするのが6時間後になることもあると語っていた。更に、Cmさんに付き合う前や付き合った直後から現在遅くなっている理由を尋ねると、Cfさんの返信が遅いため、自分も速くする必要はないと感じたとも語られていた。Cmさんは速かった時のことについては過去の経験から「速いほうがいいと漠然と思っていた」とだけ語っており、このようなCmさんの速度の調節は、相手が自分をどう受け取るかという自己のイメージよりも、相手が望んでいるかどうかを軸として考えることでなっているのだと考えられる。また、Cmさんに恋人の返信速度と友人の返信速度に違いはあるかと尋ねると、以下のように恋人への返信を優先する語りが見られた。

Cm：うーん。そうだね、まあ、普通に、当時好きだったCfちゃんは優先度はもちろん高かったし、速く返そう、速く返そうとかっていうあれでもないけど、例えば、気づいた時に友達から来ててCfちゃんから来てて友達から友達から友達からって何件か溜まってるとして、一番最初に開くのはCfちゃんだったな。そういう感じ。特に、友達との差を、んー、差をきっちりつけてたわけではないけど、まあ、Cfちゃんが優先度一番だったかな。開けた時に、返信のタイミングは、それは今でも変わらないかな。Cfちゃんから来てたら先にCfちゃんから返して友達友達友達みたいな。

高橋：友達は割と速く返す方？そんなでもない？

Cm：そんなでもないかなー。あー、うん、そんなでもないね。

Cmさんは恋人と友人を比べて「差をきっちりつけていたわけではない」としつつも、

「当時（付き合う前や付き合った直後）好きだった Cf」さんの「優先度はもちろん高かった」とし、LINE を「開けた時」の「返信のタイミングは」Cf さんが「優先度一番だった」と語り、「それは今でも変わらない」としている。友人と恋人で返信速度そのものに意識的な差があるわけではないが、返信の優先度には明確な差があることから、Cm さんの返信速度は意識はされていなくとも実際は友人よりも恋人の方が速くなっているのではないかと推測できる。

次に、遅くしていたと語る 3 人を見ていく。まず、Bm さんからは、以下のように分単位で遅らせる語りが見られた。

Bm：うん。あ、でも逆にそんなに速く返してもめんどいしなーっていうのがあるからなあ。俺は。ちょこっと時間空けてたような気がするけど。10分は空けてたと思うよ。

高橋：ずっと？

Bm：俺 LINE 返すの遅いから。

高橋：あー。下手に返すと速く返せるって思われるのが嫌だって＝

Bm：＝そうそうそう。

Bm さんは「速く返してもめんどいしなーっていうのがある」ため返信に「10 分は空けてた」と語っているが、何に対して「めんどい」と思っているのかは語られていない。ただし、自身の返信の遅さから速く返信できると思われることが嫌だという語りや、それ以前の語りで普段から 20 分程度は空いていたため彼女の返信の速度は気にしないというものがあることから、自分が本来と違うイメージで捉えられたり、返信が早すぎることで相手に気を遣わせてしまうことに対し煩わしさを感じているのではないかと推測できる。Bm さんは恋人関係になった直後の相手に対しては「10 分は空けてた」とする一方で、以下のように友人には速く返すと語っていた。

Bm：あ、でも友人の時はすぐ返すけどー。うん。長引かせるとめんどくさいし。

Bm さんは「長引かせるとめんどくさい」ため「友人の時はすぐ返す」と語っている。関係形成直後の恋人には「10 分は空けてた」と語られていることから、友人は「長引かせる」ことなくその場で終わりたいとする一方、恋人は「長引かせ」たいと考えていたため遅らせていたのだと考えられる。

また、Bf さんからは、相手の返信速度だけではなく、相手の既読を待っていたような語りも見られた。

Bf：なんか気にしちゃうんだよね、すぐ返信しちゃったらまるで待ってたかのようになっちゃうんだよね（笑）すごい待ってたかのようになっちゃうのすごい恥ずかしくて（笑）それ

なら少し空けて余裕持って返した感がね。

(中略)

Bf: あと既読はね、既読つくのを待ってた時はある。既読ついたときにばって画面消してやばいやばい！みたいなことはあった (笑)

高橋: (笑) それは向こうの既読がついたのを見て既読がついたら…

Bf: すぐホーム画面に戻るみたいな

高橋: なんでなんで (笑)

Bf: だって向こうが送ってすぐに既読ついたら画面開いて待ってるのバレちゃって、それバレたくなかったから。

高橋: なんでダメなん？

Bf: なんか恥ずかしかったんよ。

高橋: あーそこは待ってるのが恥ずかしいの？

Bf: うーんなんかすごい待ってるのが恥ずかしかったから。

高橋: 実際待ってたんじゃないの？ (笑)

Bf: うん待ってた (笑) でもそれバレたら嫌だなんて思ってさ (笑)

高橋: なるほどね。じゃー既読気にしてた時はじっと見て

Bf: そうそう。開いて既読ついてないなーって少し時間経ってまた見て既読ついてないなーってやってた。

Bf さんは相手からの返信に「すぐ返信しちゃったら」「すごい待ってたかのように」なるのが恥ずかしいとし、「それなら」として「余裕もって返した感が」と語っている。その後の具体的な内容は言われていないが、繋ぎの言葉に「それなら」という比較を用いていることから、「すごい待ってたかのように」なるよりも「余裕持って返し」ているように捉えられた方がいいと考えていると推測できる。さらに、Bf さんは相手から「既読つくのを」待っていたが、実際既読がつくと「すぐホーム画面に戻る」ようにしていたとも語っている。LINE では、メッセージを送られた側が特定の相手とのメッセージのみが表示されるトークルームを直接見た時に、メッセージを送った側のメッセージに既読の表示がつくため、見たのかどうか、いつ見たのかわかるようになっている。そのため、Bf さんの言う「ホーム画面」では、例えば相手がすぐにメッセージを送ったとしても既読がつくことはない。そして、Bf さんはそのように「ホーム画面に戻」っていたのは、「向こうが (メッセージを) 送ってすぐに既読がついたら (トークルームの) 画面 (を) 開いて待ってるのがバレ」てしまい、そのように「バレ」ることが「恥ずかし」いため「嫌だ」と語っている。つまり、返事を待っていたという事実が相手に伝わり、そのようなイメージがつくことが「恥ずかし」いとしているのである。既読を表示する機能は LINE 特有のものであるため、このような相手の返信だけではなく、相手や自身の既読表示を気にし、それにより「(相手の返信を) 待っている」というイメージがつくことの懸念があるということは LINE 特有のものだと考えられ

る。そして、Bf さんはこれらのような相手の返信の速度を気にして時間を空けたり、既読の表示についての懸念が「付き合いたての頃」にあったとし、現在は慣れたため「気にしなくなった」と語っていることから、付き合った当初の、相手に与える自己のイメージを気にしてしまう恋愛関係特有のものでもあると考えられる。また、Bf さんは第二節での語りであるように、「付き合いたての頃は気分が浮かれて」いるとし、その時の恋人に限って返信速度を調節したとしていた。そして、友人は現在の恋人には特に速度調節を行っていないと語っていることから、Bf さんの自身の返信速度の意識は付き合った直後の恋人に限ってされているものだということがわかる。

また、Cf さんからは返信の速度において、以下のような自身のイメージを気にしている語りが見られた。

Cf: や、なんかね、気まぐれ(笑)なんか「今?もう返しちゃう?」みたいな時は返さん。

高橋: あー。返しちゃう?って何よ。

Cf: え、なんかもう、「もうこれ、んー、もうちょっと後にしよ」ってなったら、1 日後とかになっとる。

高橋: もうちょっとじゃないやん。

Cf: なんて言うん。その時は、なんかもう「30 分前に来たやつもう返す?」みたいな、ノリだったからちょっと置いとこうと思ったら、もうなんかめっちゃ何時間も経とった、みたいな。ことがあるから返さん風になる。

高橋: それは返すの速いのが嫌だ、とかそのタイミングで返すのが微妙だなってこと?

Cf: なんかめっちゃケータイ触とる人だなって思われたくないだけ。うん。

(中略)

Cf: 向こうの速度を気にしたことはない。とにかく速かった記憶しかない。私はそれにすぐ返信するのが嫌で時間を空けとった。

(中略)

高橋: (笑) 逆に Cf さんの的にはどんくらい空いたらオッケーなん?

Cf: なんか数時間。なんかめちゃくちゃ暇じゃんみたいな感じには思われたくなくて、ちょっとさっきのときは見れなかったけど今は返せるよぐらいがいいなと思いつつ、まああんま考えてないってのが 1 番かな。

高橋: 30 分だったらまだちょっとおいとこうかなみたいな、なるん?

Cf: 気分かな。何考えとるんかなーほんとに。

高橋: 自分でもわからんやん。

Cf: なんて言うん、別に誰かに限ったことじゃないけど、バイトの社員さんとかから「この日入れませんか?」みたいな LINE 来てもすぐには見たくない。はー。ちょっとおいとこ、みたいな。

Cfさんは「めっちゃケータイ触っとる人」や「めちゃくちゃ暇じゃんみたいな感じには思われたくなく」、「ちょっとさっきのときは見れなかったけど今は返せるよぐらい」を「いい」として、相手の返信が速かったとしても「それにすぐ返信するのが嫌で時間を空け」るのだと語っている。そしてその時間については「30分前に来たやつ」への返事を「もう」として、「数時間」空くのが望ましいとしている。このように、Cfさんは返信が速いことでつく自己のイメージに対する懸念があり、それによってわざと返信を大幅に遅らせていた。恋人に限ったことではないとされているため本稿に深くは関わらないが、自己のイメージが速すぎることでマイナスになると捉えられている点は留意しておきたい。

このように、自身の返信速度を意識し行う速度調節も、速くするか遅くするかという点において大きな違いが見られた。Afさん、Cmさんは、自己のイメージよりも相手のペースに合わせることによって速くしていた。その一方でBmさん、Bfさん、Cfさんは、速く返すことができたり、相手の返信を待っていたというように相手に捉えられることを恐れ、そこから「暇な人」というようなマイナスなイメージが自己につかないよう遅らせており、自身の返信速度についての意識についても大きな違いがあることがわかった。

第四節 頻度

この節ではそれぞれのカップルの LINE の頻度について分析をしていく。そのため、頻度についてより意識的に頻度を多くしていたカップル B から挙げる。

まず、カップル B では、第一節でも述べたように二人きりで出かけた日から付き合うまで「関係を切らさない」という目的で 20 往復という高い頻度を毎日意識的に行っていた。そして、付き合った後からは、Bmさんからその頻度を保つことを提案されて、意識的に保たれていた。Bmさんはこの提案についてはあまり覚えていないと言ったものの、「一度途切れると LINE するのが難くなる」、「話題も作るのが難くなる」ことが嫌だと語っていた。この毎日という頻度は直接会う機会が増え会話量が少なくなった現在も保たれており、これらのことから、カップル B では LINE が関係性を保持するためのツールとして扱われることで、付き合う以前から現在に至るまで意識的に毎日という高い頻度を保っているのだと考えられる。

次に、カップル A では、付き合う前の LINE については二人で出かける約束の日時を決める等の事務連絡の会話しかしていないため頻度は低く、現在は毎日してはいるが挨拶程度しかしておらず、会話量は少ないと語られていた。その一方で、Afさんからは以下のように付き合った直後は頻度が急に高くなり、会話量も多くなるという語りが見られた。

高橋：でも付き合う前ってやっぱそんなに LINE されてなかったんですけど、(Af：あーもう全然) されてないんですよね、ほとんど頻度はないって感じですかね。

Af：あ、付き合う前ですね。(高橋：はい) そうです、そうです。

高橋：でも付き合ってから直後急に上がるみたいなの。

Af：あ、あがりましたよ。もう向こうからめっちゃ LINE くるようになるじゃないですか、質問が。

(中略)

高橋：付き合いたての頃って、電話週一じゃないですか。そんな時はやっぱ、会話やりとりされてます？

Af：あ、LINE ですか？

高橋：LINE のメッセージのほうで。

Af：たぶん、基本なんかそっちが、そうです雑談が多い、何やってるのーとか、今何してるのーとか。バイト終わったよーっていうのが、報告とかありましたけど。

高橋：会話量は今より断然多いってことですね。

Af：全然違います。最初の LINE、やりとりだと、こう、私が、私基本わけて送るんですよね。なんか、まとめて改行して送る人いるじゃないですか、1 個を。私基本びーびーびーみたいな。「了解」「ありがとう」みたいな感じで 2 個使う。基本うち 6 個ぐらいの会話で、相手も 6 個ぐらいの会話。その、これに対する返信、これに対する返信みたいな。こう、続いた時あります。

Afさんは付き合う前のLINEはほとんどなく、付き合った直後は急激に頻度があがったとして、「向こう（Amさん）から」「質問が」「めっちゃLINEくる」と語っている。その質問自体はデートの約束の詳細を決めるような内容ではあったが、Afさんから「なんか質問攻めになってた」「（Afさんが）続けたかったのかな」とも語られていることから、やりとりをする必要のある内容ではありながらもAfさんから見て不自然に思うほどの量で質問がされていたのではないかと推測できる。そして、Afさんは現在と付き合った直後のLINEの会話量は「全然違い」、「雑談が多」く、様々な話題をそれぞれわけて送っていたため、話題の多さからも、必然的に会話量が多くなっていると語り、現在の会話量の少なさについて、現在は通話をするのが多く雑談はそれによってすましており、メッセージで「話すこと（が）なくなった」からではないかと語っている。このことから、カップルAでは付き合った直後は通話ではなくメッセージによってコミュニケーションをはかっていたため話題が多く出され会話量も多かったが、現在はコミュニケーションのほとんどを通話に頼っているため少なくなったのだと考えられる。このように、カップルAは付き合う以前の頻度は低かったが、付き合った直後は一時的にメッセージによるやりとりに頼るため頻度だけではなく会話量も増え、そこから通話に頼るようになることで毎日という頻度は継続されながらも一日の会話量が減っていったことがわかる。

最後に、カップルCでは、Cmさんは付き合う前は毎日、現在は「毎日ではない」「2、3日に一回ぐらい」と語っており、付き合う以前の意識している段階はやりとりが多く、「むしろ今の方が少ないんじゃないか」と語っている。また、Cmさんは付き合う前はなるべく返信をするよう心がけており、返信速度についても付き合っている現在の方が遅いとしている中で、以下のように意識的にやりと리를増やしているような語りが見られていた。

Cm：（付き合う前のLINEを見返して）意識的に文面多いかもしれんなあちょっと。

高橋：言葉の量が多いってこと？

Cm：んー。言葉の量が多かったり、あと話題提供が多かったり。

（中略）

高橋：文面が多いのは意識する前からこうなの？

Cm：うーん、そうだね。意識してからかな。それにプライベートのこととかをLINEで話すようになったかな。今までは事務的な内容とかで会話量多かったからプライベートとかのことは少なかったけど、意識し始めてからはここでパフェ食べてきたよーっていうね…分量自体は増えたかもしれない、意識し始めてからは圧倒的に事務的な内容よりプライベートな内容が増えたかもしれない。

Cmさんは相手を意識し始めてから「言葉の量」やプライベートな内容などの「話題提供」が増え、「意識的に文面多」くしていると語っている。同時期のLINEについてCfさんは特

に変化を感じていなかったと語られており、付き合う前についても「毎日ではない」とされていることから、Cmさんと捉え方が違うため実際の頻度はわからないが、カップル C でも意識的に頻度や分量を増やされていた。

このように、それぞれの段階に細かな違いはあるが、どのカップルにおいても共通して、意識した相手に対しカップルの一方が意識的に頻度を増やしていた。

第五章 考察

この章では、第四章の分析を踏まえ、大森（2014）と比較し、その相違点を挙げて考察していく。

まず、大森（2014）との共通点である。大森は自身の調査結果からケータイ・メールは「きっかけ」を作るための欠かせないツールと語っており、この点については本稿の調査対象者でも最初に相手の連絡先を知る際に LINE が選ばれたり、最初のデートの誘いを LINE で行われたりと、合致する部分があると考えられる。また、大森（2014）では直接メールをすることができるかやメールのやりとり等によって相手が自分に「脈」があるかどうかを測っているとしていたが、前章で触れたように、Af さんからは「せっかく好意持たれてるのに、あ、終わっちゃったって。こんな感じでミスっちゃったやだなーとか。」と語られているように、相手とのやりとりによって相手が自分を好いてくれているかどうかを気にしている語りが見られており、類似しているように捉えられる。更に、本稿の調査対象者の中では、相手の返信速度が遅いと自身が失敗したのではないかと捉えるような語りや、返信速度によって与える印象を気にして自身の返信速度を調節するという語りも見られていた。このような語りは、ケータイ・メールにおいて相手の返信速度や有無によって自分の失敗ではないかと捉えるという語りや、メールのようなツールによって相手に与える自己のイメージを操作するというものに酷似していた。

このように、本稿の調査の中では大森が行った調査と共通する部分がいくつか見られた。その中には類似するような語りもあったが、その一方で、それらは大森が調査を行っていた恋愛関係構築段階においてではなく、恋愛関係が構築された直後において語られており、同じような事象であってもそれらが表れる相手との関係性の段階が変わっていた。大森（2014）ではメールを「きっかけ」としており、本稿の調査対象者からも相手の連絡先として最初に LINE を知り、その後も LINE を中心にやりとりを行っていることから、そのような重要な連絡先としての役割は LINE においても変わらないと考えられるが、その一方で、カップル A やカップル C ではいつ友達登録を行ったのかということに関して双方の意見が食い違うこともあった。このことから、メールとは違い、LINE では相手の LINE を知ることや自分の LINE を知られること自体は重く捉えられておらず、メールアドレスよりも気軽に知ることができるものとされているのではないかと考えられる。また、カップル C では最初のデートの際の誘いが LINE でなされたのか対面で行われたのかが定かではなかった。このことから、LINE は関係性を構築するツールの一つとして使われてはいながらも、LINE のやりとりは意識されておらず、相手と LINE でやりとりを行うことがはっきりと特別視されているわけではないのではないかと推測でき、これらの事例はメールを特別なものとして扱う大森（2014）との大きな違いの一つだと言える。

また、他にもいくつか違う部分があったため挙げていく。例えば、大森（2014）では電話や対面に比べメールが自己のイメージを作り上げやすく、選ばれやすいとしていたが、今回の調査では対面で話す機会がある時に LINE を選ぶことはあまりなかった。また、大森（2014）

では速く返信することのみを良いこととし、それによるイメージの操作を取り上げていたが、本稿の調査対象者からは単に返信が速いことを良いこととして速めるのではなく、相手に合わせた結果として速くなっているというような語りや、遅くすることで自己のイメージを操作している語りが見られており、速くすることでイメージを操作しているような語りが直接されることはなかった。その一方で、わざと遅らせると答えた人の中からは、速く返信することで自己にそぐわないイメージや「暇な人」というマイナスなイメージを相手に与えてしまうことを危惧する語りもあった。そして、恋愛関係における相手の返信速度が遅い場合に「そういう（返信が遅い）人なんだろうな」と捉えていたという語りがあったことから、メールとは違い、LINE においては送信者側にも受信者側にも遅いことに対するマイナスなイメージがあまりないことがわかる。更に、自身の返信速度について、Bm さんの返事を分単位で気にしているという語りや、Cf さんの「30 分」を「もう」と捉え、「数時間」を「いい」とする語りもあり、メールと違い LINE では単純な速さや遅さだけではなく「分」という細かい時間を気にしている語りが見られていた。また、Bf さんからは既読表示についても触れられており、それによって自身がメッセージを送った後、相手がいつ見たかを気にし、自身の既読もすぐ付いてしまわないようにしていたという語りも見られていた。既読表示は LINE の機能の一つであり、送っても返信がなければ相手が見たかどうかはわからないメールと違い、送った段階で既読が表示されれば相手が見たということが分かる仕組みになっており、大森（2014）が中心に取り扱っていたメールにはないため、これは大きな違いの一つと捉えることができる。

このように、本稿の調査の中では大森（2014）との違いもいくつか見られていた。ではなぜこのような違いが生まれるのか。その要因を考察するために、以下のような Af さんからの既読表示についての語りに注目したい。

Af: あ、未読スルーめっちゃめっちゃします。既読すんだったら、逆になんていうんですかね、見てるんだったら返信しろってなりません？未読だったら全然セーフって感じ。

「未読スルー」というのは相手からメッセージが来たことがわかっていても、既読表示を付けることなくあえて返事をしないことだが、Af さんは既読になれば「返信しろってなる」とする一方で、未読であれば「全然セーフ」だと語っている。このような発言からは、「既読の表示を付ける」ことが「返信しなければならないもの」と扱われ、付けなければ「返信しなくてもいい」と捉えられていることがわかる。つまり、「既読を付けることが可能」だということが「返信をすることが可能」だということになっているのである。このことから、既読の表示は単に読むことができたという表示ではなく、「返信することができるという合図」にもなっているのではないかと推測できる。そして、そのような意味で、相手に送り、相手からの返信が届くまでの速さで相手の興味や関心の度合いを測っていたメールとは違い、LINE では既読が付くタイミングで相手の返信する意思が確認でき、その段階で相手の

興味や関心の度合いが測れるようになっていのだと考えることができ、LINE ではメールよりもより速く相手に意思表示ができるようになっていと考えられる。更に、付き合った直後の恋人との LINE は遅らせると語った Bm さんが友人に対しては「長引くのが嫌だ」という理由で速く返信をするとしていることから、速く返信するやりとりはその場で終わるものだと認識していることがわかる。このその場で終わるものとは、対面での会話に準ずるものだと考えられ、付き合った直後の恋人は遅らせていることも踏まえると、返信速度によって、その場で終わる会話のようなツールか長くやりとりをする手紙のようなツールかというように、LINE の役割を分けて扱っているのではないかと推測できる。このように、LINE ではその特性によって返信や意思表示がメールよりも速くなり、より対面で行われる会話的な役割を担うこともできるようになってきており、それによって相手に与えるイメージやその役割がメールよりも多様化したことで、行動も複雑化していることがわかる。

また、カップル B では、以下のように、付き合った後に Bm さんから毎日という頻度を保つことを提案されるような語りが見られている。

Bf: 今も、うん、なんか返信返ってくんの遅いけど、途切れることはないかな。家にいるときだけ途切れてるけど、他はずっとしてる。

高橋: マジか。

Bf: うん、なんかね、それは一応ね、付き合うときにね、決めた。

高橋: え、決めたんだ。毎日しようって？

Bf: そう。なんかそんなたくさんじゃなくても、途切れることがないようにしようねって。

高橋: あー。それはなんで？

Bf: なんだろうね、なんか向こうから言い出したことだから、うん、なんかよくわからんけど、なんか繋がりを持っていたいんじゃないかなー。なんか簡単に切っちゃうんじゃないって、繋がっていたいのかもねっていう。

Bf さんはこの提案の理由を Bm さん側からのものであることから「よくわから」ないとしつつも、「(LINE を) 簡単に切っちゃうんじゃないって」「繋がりを持っていたいんじゃないかな」と推測しており、LINE のやりとりを「簡単に切らないこと」が「繋がりを持つこと」と捉えていることがわかる。つまり、対面でのコミュニケーションの代替として、直接会っていない間の繋がりを保持するためだと捉えているのである。加えて、前章で分析した通り、その程度に差はあるものの、どのカップルにおいても LINE は恋愛関係を構築するツールの一つとして使われていた。特に、カップル B では構築した関係性を維持するために一定の頻度や分量が意識的に保たれており、恋愛関係の構築段階において LINE がコミュニケーションをはかる重要なツールとして扱われているような面も見られた。しかし、その一方で、各カップルの LINE の扱いの程度の差には、対面で会う機会が多いか否かということに起因するように考えられる。実際、LINE に大きく頼っていたカップル B に対し、一

部のみを頼っていたカップル A やカップル C は直接会う機会が多く、カップル B 自体も LINE に頼るようになったのは Bf さんが共通のサークルを辞め、会う機会が減ってからになっており、このことについて Bm さんも「現実（対面）で喋っているからそれまで LINE はしていなかった」と語っていることから、LINE はあくまで対面で話すことがなくなったからこそ頼られるようになったのだとわかる。これらのことから、LINE は関係性を構築するために使われながらも、あくまで対面で行うコミュニケーションを補完しているものとして扱われているのだと考えられる。

大森（2014）では対面でのコミュニケーションとメールでのコミュニケーションを明確に分け、どちらかを選ぶとされていたが、LINE ではそういう語りは見られず、対面に準ずるものであるからこそ、対面の補完として使われていた。この点はメールと LINE の大きな違いである。そして、このような違いから、現代の若者にとって、LINE は対面で行うコミュニケーションを文字にすることで時間や場所を選ぶことなくすることができる、いわば対面で行う会話の文字化を行うツールとなっているのである。

《参考文献・URL》

- ・大森 美佐,2014「若者はどのようにして恋愛関係を成立させるのか：ケータイ・コミュニケーションに注目して」, 家族関係学：日本家政学会家族関係学部会報(33), 27-39,
- ・中村 晋介,2016「大学生と恋愛：恋愛に対する積極性の促進要因と阻害要因に着目して」, 現代の社会病理 (31), 95-108,
- ・中西 祐子,2018,「現代大学生恋愛事情 ―ロマンティック・ラブ／コンフルエント・ラブ／草食化―」, ソシオロジスト,20,31-47
- ・原田曜平,2010『近頃の若者はなぜダメなのか 携帯世代と〈新村社会〉』,光文社
- ・総務省 | 平成 29 年版 情報通信白書 | SNS がスマホ利用の中心に
(<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc111130.html>
2018 年 6 月 18 日取得)